

大人のまちの楽しみ方アソビノベーション+ONE

第9回「遊びで、住むまちをジモトにできるだろうか？」

平成27年9月26日（土）10時から12時 於：セッション杉並視聴覚室

コース学習支援者：(株)エンパブリック 広石拓司

補助者：(株)N9.5 齊藤志野歩

学習支援者 広石

最近、いろんなところで見てもらっている動画(※)です。ある企業のプロモーションの1つなのですが、遊びといえば遊びです。

※動画再生

化粧品会社のプロモーション。建物の前に2つの入口があり、1つには「平均」、もう1つには「美人」と看板が貼ってある。建物に入る人は、看板を見て、自分はどちらから入ったら良いのだろうと一瞬悩むが、それぞれに合っていると思う入り口から入っていく。多くが「平均」の入り口を選ぶが、中には「美人」の入り口を選ぶ。「美人」を選んだのは、子供、障害をお持ちの方と友人、自分らしい美しさの基準を持っている人たち。自分自身を「平均」と貶めるのではなく、自らの美しさに気づいて欲しいという化粧品会社からのメッセージを伝えている。



学習支援者 広石

これも、遊びですよ。こういうことを日本の企業で出来るのでしょうか。ここが、まちと遊びを考えるポイントだと思います。ある種の気持ちの余裕やリスクを考えないと出来ませんよね。編集しているから見やすいのでしょうか。

学習支援補助者 齊藤

動画にも出てきますが、「なにこれ？」と怒っていた人もいるんでしょうね。

学習支援者 広石

みなさんはどう感じましたか？

参加者

「平均」を選んでしまうかも。

参加者

「美人」を選ぶ方が良いとするのが、イラっとする。

参加者

そちらにいったら面白いという仕掛けは良いなと思います。いつもこっちだけど、今日はこっちを選びませんかという話なのでは？

学習支援者 広石

ヨーロッパ系の企業は、こういう形のメッセージの伝え方が多くなりました。半分、社会実験、半分は遊びのようなパターンが増えています。この動画は、女性の自己肯定感がテーマです。世界的にみると、女性の立場が低い国もあって、動画に出てきた女性たちも、そのような国の方が多かったようです。そういった国に、メッセージを伝えるのが面白いと思います。遊びというのは、自分だけで遊ぶのもあるのですが、みんなで何かを考えるキッカケになって欲しいなとも思います。

では、今日の本題に入りますが、テーマは「地元」です。みなさんにとって、地元って、どこですか？

参加者

地元は長年住んでいる杉並です。

参加者

帰るところは山梨なのですが、長く住んでいるところというと東京です。方言も身につけていないので、中途半端な気持ちもします。

参加者

人生の中で一番長いのは愛知県です。

参加者

住んでいるのは杉並なので、地元なのですが。出身は別の地区です。地元というと、吉祥寺と言えます。ずっと遊んでいた地域なので、自分の中では地元です。実家と地元は違います。

参加者

1つの地区を選べるのですが、そこからさらに小さい地区に絞られます。子供の時に遊んでいた地区で、自転車でいける範囲内が地元なのかなと思っています。

学習支援者 広石

大阪城のあたりが育ちなのですが、大学から東京に来たので、東京の時間が長くなりました。下町で暮らしていて感じるのは、新住民と旧住民という話がよくありますが、20年住んでいても新住民だなということです。東京に住んで20-30年の人は多いと思いますが、その人たちも新住民の感覚の人も多いのかなと思います。よく三代続いて江戸っ子と言いますが、現代も旧住民というのは親の代くらいから住んでいる方を呼ぶのかな。

地元と似た言葉で「ホーム」という感覚は、何なのでしょう。地元とホームタウンは同じなのか？地元と故郷は違うのか。何か違う感じがしますよね。「故郷はどこですか？」と聞かれたら、スッと答えられるのですが、「地元はどこですか？」と聞かれると考えてしまいます。

参加者

地元というならば、今、自分が関わっているエリアを、そう呼びたいと思います。故郷は、かつて関わっていたエリアなのかな。

学習支援者 広石

地元というのは、幼少期を過ごしたとか、長い間住んでいるということではなく、手の届く範囲感があるのでしょうか。

参加者

その町の人や店を知っているのも地元感なのでは。故郷の人や店は変わってしまっているので、地元の感覚は少なくなってきました。

学習支援者 広石

地元から、また故郷になることもあるのでしょうかね。東京に住んでいる人が、どれくらい自分が住んでいるまちを地元と思っているのかな。杉並に住んでいることは、地元が杉並なののでしょうか？

参加者

ずっと長く住んでいますけど、もっと長く住んでいる方に教えてもらって、今にいたります。そうすると、長く住んでいる私も、まだ新人なのです。

学習支援者 広石

「新住民の参加が必要」とコミュニティを考えるうえで言われています。大人塾に参加する方も、新住民の方が多いようです。住んでいるところを知りたい、地元で友人が欲しいなどをキッカケに参加する人がいます。大人塾というのは、地域に参加するキッカケにもなっているようです。社会教育センターで実施される、「自分をふりかえり、社会とのつながりを見つける大人の放課後」が大人塾。では、社会とのつながりとは何でしょうか。大人の放課後に、地域は必要なのでしょうか。そういうことを考えてコースを企画している時に、放課後の時間を過ごす場所が地元感を感じられるのではないかという話になりました。

参加者

学校にいるより、放課後の方が長かったので、街により地元感を覚えたのかもしれませんが。朝、駅であった友人と、学校に行くのをやめて、ずっと話しこんでいた思い出があります。

学習支援者 広石

在学するだけでは地元感はないと思います。遊んでいた時間がある場所が地元になるのでしょう。そう考えると、遊びをテーマにした大人塾は地元を作るキッカケになるのかもしれませんが。サッカーチームの熱心なサポーターの友人がいて、彼は自分には故郷がないと話しているのですが、「東京、東京、俺たちの東京♪」と応援ソングをずっと歌っていたら、初めて自分の故郷を感じたそうです。今の学生に話を聴くと、故郷があるのは羨ましいと話しています。我々の時代に比べると、故郷を感じる機会もないのでしょうか。早稲田大学は、かつては地方からの学生が多かったイメージですが、現在は東京出身が7割近くをしめているとききました。学生にとっては、夏休みに帰省するのがカッコいいそうです。

学習支援補助者 齊藤

ドラマでは、地元には何かある人が、「土」の人。移住者やフラッと来る人が「風」の人という台詞がありました。東京は外から来る「風」の人が多いため、住むときにも、そうあるべきと勝手に思っているようです。ある人が、関係性をあきらめるべき場所が東京と言っていました。

学習支援者 広石

都市的な暮らしとは、そういうものを外すのが正しいのでしょうか。オフコースという歌手グループの「YES-YES-YES」の一節に「君の嫌いな東京も、秋は素敵な街。でも、大切なことは、2人であること♪」とあります。2人の関係性が大事で、東京という地域の重要性は低い。これは80年代の気分なのでしょう。当時の人たちの地域に関わる姿勢の表れだとも思います。今回の大人塾の企画を考えるうえでも、遊びと地域は悩み続けています。そんな中、住む街と暮らす街は違うのではと、最近気づきました。東京に住んでいるけど、東京に暮らせているのかな。では、みなさんこちらはご存じですか？「マイフェアレディ」の歌です。

On the street where you live	君の住む街角
I have often walked down this street before	この通りは、前に何度も歩いたことがある
But the pavement always stayed beneath my feet before	いつも敷石をしっかりと踏みしめていたのに
All at once am I several stories high	突然、僕は天にも昇るような気持ちになった。
Knowing I'm on the street where you live	ここが、君の住んでいる通りだと知ったから。
Are there lilac trees in the heart of town?	ライラックの木は街の真ん中にあるかい？
Can you hear a lark in any other part of town?	街のほかの場所でヒバリのさえずりが聞こえるかい？
Does enchantment pour out of every door?	どの家のドアからも喜びがあふれているかい？
No it's just on the street where you live	いいや、それは君の住んでいるこの通りだけさ。

いつも通る馴染みのある道が、突然、自分にとって重要な道になりました。それは、好きな人が住む街だとわかったからです。仲の良い人と過ごした記憶があることが、地元感の1つなのではと気づきました。機能としての街としての東京は大きいと思います。具体的な人や思い出、イメージがわいて、初めて土地に対しての愛着が生まれてくる。それがでるかどうかで、地元に関わる理由や地域につながるキッカケがでてくるのかもしれない。

これを皆さんと一緒に考えていきたいのが、アソビノベーションです。遊ぶというのは、「僕」と「君」がいて、その間に「遊び」がある。地域は背景にあるのでしょうか。大人塾に参加していると、地図上で知っていた地域と、友達と遊んだ地域のイメージが違ってくるとわかったと思います。大人塾に来ている方は、地元に関わりを持ち始めているのではないのでしょうか。杉並の通りの中で、「ここは、誰かと来た道だな」「ここは、あれがある道だな」と記憶があると、特別な道になりますよね。みなさんに、そういった場所を持って

いただくのは素敵なことだと思います。それと、東京に住んでいるけど、暮らしていない方を巻き込んでほしいとも思っています。そういうことができると、街はもっと楽しくなるのではないのでしょうか？それを、このコースで出来たら嬉しいです。



資料に「アソビのストリート」と書いていますが、日常では「Stranger(知らない人)」と出会う場所は少ないです。ママはママのネットワーク、パパはパパのネットワークがあり、それぞれのネットワークを横断することは少ないですよ。ホームパーティーというのは、知っている者が集うのではなくて、知らない人同士が集まってご飯を食べる機会です。仕事でやっている、どうしても同じネットワークの人しか集まらず、「知らない人」と出会わないのです。その突破口として、遊びがあると思います。誘い合うことで、知らない人とも出会えます。ITの専門家の宇野常寛さんが言っていました、都市が何も生み出さなくなったのを気づかなきゃいけないと。土地や都市が何も生み出さなくなったと、地域づくりをしている人が忘れていると指摘していました。原宿という場所に行けば、すべてが変わるというイメージがありましたが、今はそれほどではなく、ネットのコミュニティの方が創造的です。

東京が面白いというのが弱まっているようだ、街で遊ぶよりも、ネットで知り合う人と遊ぶ方が楽しい時代になっていくのでしょうか。東京というのは様々な人が密集して住んでいる場所でもあります。いろんな人を巻き込んで、さらにもう一周「知らない人」も巻き込んでいけるのが、遊びだと思います。大人塾のワークショップだけで誘うのは大変ですよ。街にあるものを素材にして遊んだり、参加者がちょっと「知らない人」と出会えるような関係性が作れたらと思います。本を袋に入れて交換するというのは、外の人に向けても応用できるのではないのでしょうか。アニメ・ストリートミュージアムで「アニメに関するおすすめの本」を交換することもできますし、西荻窪の小物のお店で、各地のお土産を交換するなどもできます。残りの期間は、皆さんとこういった企画にチャレンジしていただけたらと思います。

そのヒントとして、今日は齊藤さんの取り組みを紹介してもらいたいと思っています。

●学習支援補助者 齊藤さんがやっていること

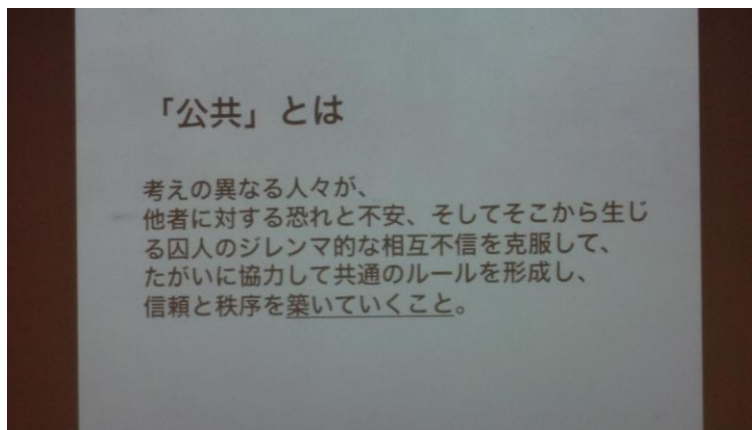
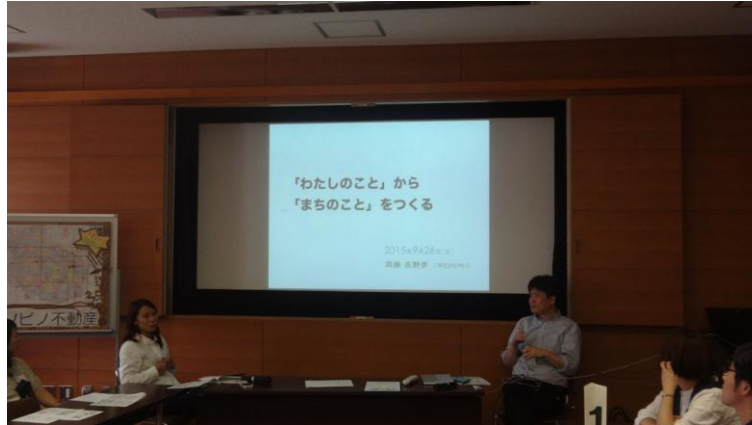
学習支援補助者 齊藤

街の〇〇、杉並の〇〇をいきなり作ってはいけないと思っています。やっているうちに辛くなるので、まずは自分のこと、そこから街に広げていく。「僕」と「君」のようなところから、他の人に広がっていくのだらうなと思っています。おたがいさま食堂というのを2年半ほどやっています。最初は知り合いばかりでした。食堂と名付けられています、キッチンスタジオで集まって、ご飯を食べて、片付けしてきよならと、本当にそれだけです。子供から大人まで集まってくれています。買い出しにいて、作って、食べます。料理が上手い人が集まると思ったら、そんなことはないです。作る人と食べる人が一緒なので、おたがいさま食堂という名前です。なんでこれをやっているかと聞かれるのですが、個人的な理由で、働いてから帰宅してご飯を作るのがつらく、ママ友を誘って一緒に夕飯もしたのですが、時間があわないことからはじめました。

会社は会社の仲間、ママはママの仲間としか会わないのはつらいので、知らない人と会いたい。だから、そういう場所でやりました。自分がラクすることを考えていたのです。引っ越したばかりなので、知り合いは10人もいませんでした。そこで、商店街にいて、何か手伝えることはありませんかと聞いてまわりました。商店街は人手不足なので、よくお手伝いをしていました。場所を貸していただけることになったので、作戦会議をしたところ、他の人が集まってきました。自分のアイデアだけではやりきれないので、他の人のアイデアもでてきて、おたがいさま食堂をやってみようということになりました。もろもろあって、場所が使えなくなってしまいました。

助成金をとれたので、街の中で街のものを食べてみようということになりました。まずは、買って来たものを食べようという場所を作りました。これがもちより食堂です。買って来たものを調理して食べるのが、おたがいさま食堂です。最初の作戦会議の延長線上で、自分たちの食卓を話し合い、どのようなコンテンツにするのかは、参加者に任せました。それぞれの家庭の味になるはずだと、まずは始めてみました。みんなでやってみましたが、みんなといっても、いろんな方がいるので、アレルギーをお持ちの方もいます。そうすると、アレルギー対応、アレルギー非対応の食品が2つ出来るわけです。これも面白かったです。ネパールのもを買って調理してみましたが、小麦粉だと思ったら、米粉で失敗しました。その米粉を使って、フォーを作って食べました。フォーにはパクチーがつきものですが、パクチーが苦手な方が困りました。すると、今度はもっと苦手なものに挑戦しよう

と、魚を食べることになりましたが、捌くのはとても大変です。すると、友人に寿司職人がいるということで、プロの職人さんに作ってもらいました。知り合いの知り合いをよんでいって、最初は10人だったのが、だいぶ増えてきました。最近では、他のエリアでも勝手にはじまっています。



もう1つのターニングポイントが、まち食サミットです。家では、子供と一緒に共食をしていたのですが、新しい形の共食を考えていこうとしました。それが、「まち食」です。トークイベントをはじめたところ、新聞にも取り上げられました。ふだんと違う付き合いができるのが楽しいと話していて、ニックネームで呼びあうのも1つです。料理が苦手な人や、食べるだけの人、子供と遊ぶのが好きと言う人もいます。それぞれが、自分で自分の楽しみを発見してくださっています。そんなことをやっていると、自分の家の改修時に使ってほしいという方が現れました。大家さん自身も、みんなで食べるということに共感してくださっていますので、協働パートナーという形で作りました。あとから広がっていくことを感じています。最初は10人でも3、4か月で50人になりました。自分たちが遊ぶということと、街の遊びの境目があると思います。その差は、公共性です。自分のことから、街に広がるのは、公共。公というのは、誰でも必ず使えるということ。警察や

消防は誰でも使えますよね。公共が生まれるのは、立場が違う人たちが集まる時です。同じ立場の人たちが集まっているだけだと生まれません。違う立場が集まると、ルールを自分たちで作っていくしかありません。そのプロセスが公共です。最初から、公共があるわけではないのです。これが、自分のことと、街のことをわける場所だと思います。作ればできるのですが、作らないと無いのです。地元愛というのは、あまりないです。ニヒルな公共心というのもあります。

1つは、むしろ苦手なことをやる。得意なことをやると、得意な人しか集まりません。まわりがお客さんになってしまって、提供する一方になってしまいます。苦手なことを宣言すると、誰かの得意を引き出すことができます。苦手からスタートするのは良いと思います。2つ目、簡単なルールを適切に作る。定期的にする。いけるときに行けばよいやと思います。出来る頻度で、それぞれがやっていく。3つ目、イケてる名前を付ける。仲良くなりましょう食堂や親子食堂では人は来ないと思います。目的がはっきりしすぎている名前というのは、知らない人に会いにくいと思います。あとは、場を代弁するというので、おたがいさま食堂は月1回しか会いません。集まった方の声を代弁して、フェイスブックに載せていきました。場を代弁するように、伝えていくのは大事だと思います。4つ目は、もっともやりたいことは2番目にする。私が最もやって欲しいのは、10人が集まって、10日分の料理を作ってもらうこと。でも、それ以前に、みんなで一緒に食べるというのが楽しみにならなければ、10人が集まって作るのは苦行になると。この辺が、遊びの要素だと思います。関わる人を活かす。やってくれる人を探すのではなく、その人が活かされる仕組みを作る。失敗をいっぱいすることも大事です。1人で失敗するのではなく、みんなで失敗する。あとは、このプロセスを楽しみにしていく。この7つを大事にしてきました。なにかやるときに、「〇〇に来てください」とお誘いしません。自分の目的のために、何かまきこむのではなく、呼びかけるときには、「ご一緒にいかがですか？」と聞いています。1歩というか、半歩ずつのような歩みで進んでいます。

1. むしろ苦手なことをやる
2. 簡単なルールにする・定期的にする
3. イケてる名前をつける/場を代弁する
4. いちばんやりたいことは「2番目」にする
5. 関わる人を「活かす」
6. 仲間と一緒に、失敗し続ける・いつも実験中
7. プロセス自体を楽しむ

学習支援者 広石

あまりこういうことを話して頂く機会がないので、新鮮だったのではと思います。こういうことを考えながら、このコースをやってきました。先週はいろんなまちにでかけて、感じたこともあるでしょう。それを作戦会議をして、こういうことできそうかな、やったら面白いんだろうなというのを、まちでやってみましょう。公共という感じで、いろんな人をまきこんでいけたらなと思っています。



参加者

男性の目からみても、参加したいなと思っているのですが、まだ行けていません。今日、お話をきいてみて、行きたい気持ちになりました。

学習支援補助者 齊藤

来てもいいし、来なくてもいいというのは良いですね。

学習支援者 広石

そういうことで、皆様、また次回にぜひいらっしゃってください。友人も誘っていただいて、企画を試して頂けたらとも思います。